
約束 ~The past that forgot~

ぽろぽろ蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束（The past that forgotten）

【ΖΖコード】

Ζ2369U

【作者名】

ぱろぽろ蜜柑

【あらすじ】

この小説は妄想ので出来ています。三次元とはまったく関係の無い一次元です。 設定：APH、ヘタリアの世界が舞台。ある日会議が行われようとしていた主催国の日本（本田菊）がいなくな。最初は誰も日本がいなくなつた事に気づかないのだが、集合時間過ぎても会議場へ来ない日本を不思議に思つたイタリア（フジアーノ・ヴァルガス）達は、会議を中断し日本を探し始める。日本の携帯や家の電話に掛けてみても出ることは無く、日本の身に何か危ない事が起きたのではないかと涙ぐむイタリア。各自様々な想

いで日本を探す中、イギリス（アーサー・カーランド）は一人、他の国達とは違う場所へと向かつて いた。・・。

軽く詳細（前書き）

ヘタリアは万人受けするものではない漫画なのでヘタリアを知らない、もしくは嫌い苦手という方は「遠慮願います。

軽く詳細

約束) The past that forgottenは「忘れた過去」という意味です。某笑顔動画でRPGとしてつぶしたかつたのですがそこまでの技術は無く・・・onz

国語は好きでも上手ではないので皆さんのお気に召すかはわかりませんがよろしくお願ひします。

時代背景としては20××年の春頃。

桜がまだ蕾の頃と想像していただければ分かりやすいと思います。

ちなみに私は日本、つまり本田菊がヘタリアの中で一番好きです。一番大好きです。大事なことなので2回言いました。

軽く詳細（後書き）

まだまだひよひよですが、よろしくお願ひいたします。

人物設定（前書き）

小説の重要な人物を中心にのせていています。
性格は原作を軸にある程度脚色もしています。

人物設定

プロフィール

名前：日本 本田菊

性格：日本の化身であるせいか謙虚で物静か、はつきり物は言えないが遺憾の意を

発動したら

ハ橋に包まれず赤福状態になる。

東洋の英國と呼ばれ真面目で堅物かと思えば、実はオタクでアニメ漫画好き

という一面も持つ。

仲の良い人にはたまに毒舌のもよ。

塩分が大好きでドイツによく注意される。

一度これを決めたら意地でも曲げない頑固なところがある。

名前：イタリア（北） - フェリシアーノ・ヴァルガス

性格：イタリアの化身であるせいか可愛い女の子好き、ピザとパスタも好き。

怒ることは滅多に無くむしろ怒られる側にいる。

泣き虫ですぐ泣いちゃう。でもその分優しい心の持ち主。

絵を描くことが好きでたまに日本の絵の色塗りを頼まれることがある。

本人はあまりよく分かつてないらしいが、

イタリアいわく「日本ってやっぱり変わってるよね」らしい。

名前：イギリス アーサー・カーランド

性格：英國紳士と呼ばれるほどジェントルマンだが、本当の正体は変態紳士。

料理は壊滅的に本人はそれに気づいていないという残念な人。

昔はぐれていた時期もあったが今は大人しい。だが偶にタガが外れる場合も

ある。（酒とか酒とか酒のせいで
人には見えないものが見えるといふことで、弟が独立されたこと有。

「ばかあ！」が口癖のツンデレ。日本が大好き
(ベーコンレタスではなく元同盟という意味で)。
イギリスいわく「べ、別に好きとかじゃなくてお互い島国で

気き (ry)

廿二十廿二十*

ツンデレhshss (

名前：ドイツ ルートヴィッヒ・バイルシュミット

性格：ドイツの化身のせいか、物凄く真面目で規律正しい。時間通りに動かないと

気がすまない。

イタリアとは性格が正反対と言つていいくらいなのに、世話好きらしい

ドイツはいつもイタリアと一緒に。

そのせいか苦労が絶え間ない。

イタリアの靴紐を（「ヨ、イタリアに水を（「ヨ、イタリアに・・・。
真面目すぎるせいかたまに天然ちゃんになる。

日本とは冒薬仲間として一緒にお茶会をする。（プロイセン
目撃談）

ドイツいわく「あいつの方は、はけ口があるから随分マシ」
らしい。

名前：アメリカ アルフレッド・F・ジョーンズ

性格：元気。アメリカの化身どつこつ関係なくとても元気。ただし
落ち込んだ時の

落胆ぶりはすさまじい。

曲がつたことが大嫌いでヒーローが大好き。
自分自身もヒーローだと思っている。

空氣を読まない発言が多く、その場の空氣を壊すことが多い。
皆からはKYOといわれるが、噂では本当はAKYO等では？と
囁かれている。

イギリスの見える見えない もの は信じないが、見えるもの（トニー）は
信じる性格。

日本のアニメ、漫画やゲームが大好き。
アメリカいわく「日本の文化は本当にC○○Yだね！」らしい

名前：フランス フランシス・ボヌフォア

性格：イギリスと同じくらい紳士的（特に美人には男女関係なく）。
しかしそれは

本人の前では禁句である。

料理がとても上手で知り合いや仲の良い人に振舞うの好き。
某眉毛が作る料理に対し、食材が可哀想だからやめて！を何

千回も言い続け

ているほど腐れ縁。

でも何だかんだ言いながら最近は昔よりも仲が良い方向へと
向かっている。

悪友が2人おり、たまにその3人で集会をする。話の中心に
なるのはもっぱら

イタリア兄弟。

日本とは二次元繋がりで良い関係を築いている。
フランスいわく「芸術にジャンルは関係ないのさ」らしい。

名前：不明
性格：謎。

存在自体がまだまだ謎な人物。

その正体がわかるのはいつの日か・・・。

名前：桜&梅

性格：日本が大好き。

それ以外は謎のまま。

その正体がわかる（ry

人物設定（後書き）

今は9人ですが、小説がある程度進んだら他に登場人物のプロフィールをのせていこうと思います。

0. プロローグ（前書き）

始まりです。

0・プロローグ

「菊ちゃん、見てくださいこれ、とても可憐な花が咲いていますよ。」

懐かしい、声がある。

「おひ桜つてばこつも先に行つりやつー菊ちゃんも呆れりやつてゐるよ？」

「梅つてばいつもそういうんだから。菊さまは元気がいい子が好きだつて言つてくださつたもの。呆れてなんかないんだから!…そうですね、菊さま?」

まだ幼い少女が、私に話しかけてくる。

「いいえ!今のは絶対呆れた顔だつた!…昨日だつて一人で先に走つて行つちゃつて、こけちゃつたじゃない。忘れたとは言わせないよ?」

「あ、あれは仕方なかつたの!…急いで飛んが飛び出しつきたんだもの!…しうがなもん・・・。」

う。

知らない子のばずなのにふと、この子、ちこ。と気持ち
が暖かくなるのを感じた。

桜と呼ばれていた子が少し悔しそうにうつむいてそうい
ていうふうにうつむいていた。

「だったら最初から走らなければよかったのー。いつまで経っても子
供なんだから。」

「子供じゃないもんー。そういう梅、だつて 姉さまが久しづ
りに会いにくるって聞いた途端にすっごく大喜びして、子供みたい
だつた。」

いま、何姉さまと言ったのだらうか？

名前の部分がぼやけたようこ、ノイズがかかったようこ
聞こえない。

「わたしはいいの！ 桜みたいに転ぶこともなかつたし。それに
姉さまには何年も会つてなかつたから・・・。桜だつて本当は
姉さまに会える事をすゞしく喜んでるつて知ってるんだから
！」

話によるところの姉まとやは、この少女達にとつても大切な人のようだ。

私はその人のことを知っているのだろうか……？

「それはわたしだって嬉しいよ？でも久しぶりに会えて嬉しい！つて喜んでる梅は絶対子供みたいだつた！」

「！…！ そんなの普段から子供の桜には言われたくない、

「桜も梅も、もうそろそろ口喧嘩はおやめなさい。
きた時に悲しまれますよ？」

さんが

どこからか喧嘩を制止する声が聞こえる。これは、私の
声？

「うう・・・。」あんなに緊張する。

「わたしも」みんなわい・・・。」

そう素直に謝つてくる子供達の頭に、私は自然と手を伸ばしていた。

この子達は本当にいつも素直で・・・。

・・・・・ 今のは夢?

気がついたら周りは真っ暗で、うすすらと見えるのは木目のついた

天井だつた。

どつちが現実だつう、いつも見慣れているはずの天井が知らない天井に見えた。

いつたいさつきに夢はなんだつたのだろうか。

今でもこの手にあの子達に頭を触つた感触が残つていて。

夢の中では私と知り合いのように話をしていたが、まったく見覚えが無かつた。

でもなんだらう、心の中にぽっかりと穴が空いたようなこの気持ち
は？

何か大事なものを無くした時のような消失感。

日本として生きてきた長い年月、そういった気持ちは何度も味わつ
てきた。

そしてその度に自分を奮い立たせ心の隙間を埋めてきたのだ。
時間はかかるにせよ日本、本田菊はいつもそうしてきた。

今回は原因が分かつていて、分かつていないと云う不思議な気分
を味わつていて。

先ほどの夢をよく思い出さうとする、2人の少女と名前が分からな
い姉さま。

いつたい何者なのだろうか？

しかし考えれば考えるほど、眠氣を感じまぶたが重くなつていく。

別にどうでもいいことのはずなのに・・・気になるあの存在。

だが菊はすでに次の夢へと誘われていた。

菊
様

なぜ忘れてしまったのです

約束、したじゃないですか

忘れてしまったなんて酷いです

ワタシ約束守らない人は嫌い

でも菊様だから嫌いになんてなれない

だから無理やりででも約束をうりさせて頂きまますよ？

いいですね？菊様
・
・
・
・
・
・

0・プロlogue（後書き）

菊いろいろと忘れていました。

1・始まり（前書き）

イタコアカイドです。

1・始まりは

「ヴェー！ 遅刻しちゃうよーーー！」

現在2時30分、会議が始まるのは2時。イタリアは完全に遅刻をしていた。

遅刻常習犯の彼だが、最近は遅刻することもなかつたのだが今日は久しぶりに遅刻をした。

（ドイツに怒られちゃうよ・・・！！！ 急いで会議場に行かないと！）

スーツ姿で走つてゐるイタリアは、人の目を惹きつけていた。会議場があるのは日本。そこで外国人がスーツで走つてゐるのは異様な光景に周りの人には見えた。

しかし走つてゐるその青年は美形で不審者などを見る目などはしていなかつた。

人々は「眼福だなあ」とか「あの外国人の人すつごい綺麗なんだけど！」とか「どこの国の人なんだろう」と様々の思いを口に出していた。

そしてその中でも「いいわねあの男」や「の方とは是非お話してみたい！」という女性がイタリアを狙つていたのだ。

普段なら彼女たちが狙う前に彼が狙うのだが、今はそんな時間はない。

「遅刻をしているのをわかつてゐたのにナンパしました。」

なんて言つたら確実にドイツの雷が落ちる。

心の中ではあの子可愛いな、なんてちやつかり思つてゐるのだが・
・。

必死で走つて約5分。イタリアは会議場となるビルの一室の前に来て
いた。

乱れていた息とネクタイと整える。

だが心臓はまだバクバクと音を立てている。

(ここにまで来たのはいいけど・・・やつぱり入るのは怖いよ！
！)

遅刻をした時点でわかつていた事なのだけど、やはり怖いようだ。

勇気を振り絞つてドアノブにそつと手をかける。

きっと他のみんなはとっくに会議場に来ているはずだ。どんな反応
をされるだろ？きつと怒られるか呆れられるんだろうなあと、想像しながらガチャヒドアを開けた。

「みんな遅刻してめんなさい！」

がばつと音が聞こえるような勢いで日本直伝の90度お辞儀をした。
日本が「これをすれば大体のことは大丈夫ですよ。」なんて言つて
いたことを思い出しながらイタリアはゆっくり顔を上げていった。

ドイツが物凄い迫力でイタリアの方へと向かってきていた。

びっくりした彼は泣き叫びながらそう叫んでいた。
(あれは絶対に怒ってるよ・・・。どうしようなんて言つたり許してくるだろ?)

どうどうドイツが目の前まで来てガシッとイタリアの肩を掴む。ぎゅっと手を瞑つて怒鳴り声が来る衝撃に備える。しかし来ると思つていた衝撃は来ず、そつと目を開けてドイツの顔を伺つて見る。その顔は想像していた表情とは違つたような、焦つた様な様子だった。

どうしたんだ？』とイタリアが聞く前にドイツが口を開いた。

「日本と一緒にじゃないのか？」

日本と一緒に? びひしてそんなことを聞くのだから。日本せとひへ
来ていいじやないの?

そう言ひてドイツは日本はまだ来ていなことわつ返した。

「せうか・・・、イタリアと一緒に来るのかと思つたんだがな・・・。
」

少し落胆したよひそひへ

後の方にいたみんなも同じよひつな様子だった。

「あれ? 日本は一緒にないのかい?」

「日本がこの時間になつても会議場にいななんて、珍しいこともあるんだ。」

中を見回してみると日本のはない。本当にまだ来ていなによつだ。
「日本のケータイや家の方に電話しても出なかつたある、せうとな
にか危ない」とこ巻き込まれたあるよー。」

「なに不吉な事言つてんだよばかあー。」

日本が電話に出ないなんて。せう時は原稿締め切り前やアニメ
を見ている時だけなのに・・・。
みんなの話によるとこひこひこらしこ。

最初にこの会場に来たのはドイツで、こつもなりとつくて來てこ
る

はずの日本が見えないことに少し驚いたが、日本の事だから何か事情があつたに違いないと思つたそうだ。

その後にきたイギリスも同じ事を思つたようで驚いた顔をしたけど、「ああ、もしかしたらあれの事か?」と言つて自己完結したらしい。続々と会議場に国達が集まる中とうとう予定の時間になり席に着いたけど、肝心の主催国の日本がいない状況にみんなはかなり驚いたらしい。

イタリアならまだしも、日本が遅刻することは滅多にない。あつたとしても必ず前もつて会議に遅れるとい連絡を誰かにいれるのだ。しかし今回はその連絡もなく、メールさえなかつたのだ。誰かが「もしかしたらイタリア迎えにいつたんじゃないのか?」と言つた事で、そうかもしれない。とい話になつたのだが、どうしてそうなつたかというと実は前日にみんなで集まつて飲み会をしていたからだ。イタリアは普段はお酒の席では早々とお酒に漬れて寝てしまうらしいのだが、その日だけは珍しく遅くまで起きていた。

「そのままじゃ明日寝坊してしまいますよ?」

なんて言つていたので、日本が主催国として迎えに行つたのだと思つたのだ。

日本なら有り得るだらうとイタリアも思つた。

だけど実際にイタリアが来て見れば日本は一緒にいなかつた。それを見て焦つたドイツがイタリアに詰め寄つた、ということだつた。

「うえ、日本どうじちやつたんだう?」

「・・・さあな、俺はわからない。しかしこのままじゃ会議にならないぞ？主催国がいないんだからな。ドイツどうする？今回の会議の復任は確かお前だつたよな？」

「それはいいかもしないねー？」のままど時間の無駄だし。」

みんなは一齊にドイツの方へと顔を向ける。

「や、そうだな・・・。では今日は会議をいつたん中止する。その代わり日本を探しに行こうと思つただが。」

「賛成賛成！おれもそれがいいと思つよーー。」

「俺ももちろん賛成さー！日本の身になにかあつたかもしれないなんて知つたら、助けに行くのは当たり前だつゝ。HEROだからね！」

「！」

続々と賛成の声が上がつてくる。やはりみんなも日本を心配していたようで彼の身を安じる声が多かつた。

「よし。反対意見もないようだから田本を捜索することで決定だな。」

「

1・始まりは（後書き）

力つきました・・・。

途中まで書いたとこでP.Cがフリーズしてしまったため、当初の内容とは少し違っています。

さて日本はいつたいどうなったのか、わかる人にはきっとわかるかもしれませんね。

2・菊を探し隊（前書き）

2話ですね。

投稿遅くなり申し訳ござりませんでした。ごめんなさい。

2・菊を探し隊

「日本が行きそうな場所はこれでいいんだな?」

会議室の中央。みんなに見えるように置いてあつたホワイトボードには、日本がよく行く店の名前や場所が書かれていた。

日本の家はもちろん、近所の公園や行きつけの商店街、アニメ関連のグッズが置いてある店の名前などだ。付き合にも長く日本と仲のよかつた同盟国2人はもちろん、他の国達もどこへよく行くかは知っていたので案外早く揃つた。

「さて、誰かどこへ行くかだが面倒だからこのホワイトボードに自分の名前を書いていってくれ。オレは余ったところへ行く。」

話し合いで決まった「菊を探し隊」のメンバーが続々とホワイトボードへ名前を書いていった。

全員で行くと大変になるので、居残り組として何人かが連絡係として会議室となつたビルで待つことになっている。

それぞれが自分の役目を果たすために、いつもの会議の何倍もの真

剣な表情をしていた。

それをドイツは苦い顔で、いつもこんな風に会議が進めばいいと内心溜息をつきながら眺めていた。

「ドイツー、行きつけの場所に誰が行くが決まつたよーちなみにドイツはおれと日本の家に行くことになつたから、よろしくねーー。」

キリリとしたやる気満々の顔でイタリアがそう言つた。

そんな様子を見てドイツの兄であるプロイセンはによによとした顔で見つめていたが、ドイツは見ていないことにした。

「さあ、誰が行くかも決まつたことだしさつと行くんだぞー日本にもしものことがあつたら大変だからねーーーー。」

「落ち着けアメリカ、そう焦つてると上手くいく事も失敗するぞ。ここはもつと冷静に行動するべきだろ?」

「あー、イギリスの意見と同じなのは癪しゃくだけど賛成だ。アメリカはもつと冷静になれ。」

あの犬猿の仲の二人の意見が合つるのは珍しいことでアメリカは吃驚した。文句でも言つたかつたが、揉め事を起こしてはいけないと思いつこは素直に従つた。

周りも驚いてはいるがいまがそれビビりではない様で、連絡用に使う携帯について話していた。

「連絡用には携帯電話を使う。プライベート用だけでいいかもしないが、一応仕事用の携帯電話も持つておいた方がいい。なにかあつた時のためにな。」

「わかつたある。プライベート用を主に使えばいいあるね？」

「ケセセー！携帯の充電もばっちらだから何時間でも通話できるやー！」

自信満々にプロイセンが笑っているのを見て、誰もがそこは面倒見るところか？と心中で突っ込んでいた。

「だけどもし携帯の電池が切れたらどうするんだこのやー。」

「それなら大丈夫やと思つでー？日本やと携帯用の充電器がコンビ二とかの店で簡単に手に入るやつとつたし、やうやく困ることはないと思つわあ。」

少しふりふりして言つイタリアの兄の南イタリア、ロマーノに安心させるようにスペインは頭をぽんぽんと撫でる。それのおかげかロマーノの機嫌はだいぶよくなつたようだ。

携帯の充電の心配も解決し、準備もほぼ整った。後は日本を探すだけだ。

時計の方を見てみると、針は10時半を指している。

そろそろ行くかとドイツが言い出立が決まった。

ずっと日本を探すために時間を使うことができないので、夕方の5時にまたここで集合することを決めて国達は日本探しへと旅立つていいく。

最後の一人がパタンとドアを閉め、部屋を出ていった。
静寂が部屋全体を包み込む。誰も一言も喋れない様子だ。
このまま静寂が続くのかと思った時、誰かが呟いた。

「お腹空いたし。なんか食べ物ないん?」

「・・・ええええーーーこんな時になに悠長なこと言つてゐるんだよ
ポーランドーーー。」

「だつて腹が減つてはなんせやうやうへつて日本がこの前教えてくれたんよー。」いつの時は空腹を満たすのが大事だと思つしー。」

シリアルスだつた雰囲氣を思い切りぶち壊したポーランド。

朝は会議に緊張をして、朝食をあまり食べれなかつたと言つていた。

「ふふふ。実はわたくしも少しお腹が空いていました・・・。」

照れたよひにリヒテンシュタインが答える。

「ほりー。コヒテンもいつまづいたるんやし、マジで何か食べた方がよくない?」

キラキラした目で訴えかけるポーランドに、しうがないなあもう・・・と呆れるリトアニア。しかしあのピリピリした雰囲氣が消えたことで、場が和んだことには安心した。

他の国達もそう思つたようで表情には笑顔が戻つていた。

そしてスイスやベラルーシもお腹が空いていると言つたことをきっかけに、間食を取る事になつた。

会議室の電話を使って間食用の料理を頼むのだが、その役目は当たる前のようにリトアニアに任せられる。

日本の消息が掴めず不安な思いをしているのは変わらないが、今はこの和やかな空気をみんなで楽しんでいた。

日本はすぐに見つかると信じて・・・。

>b_r<
>b_r<
>b_r<
>b_r<
>b_r<
>b_r<
>b_r<
>b_r<
>b_r<
>b_r<

2・菊を探し隊（後書き）

2話が出来上がるまで数時間かかりました。
キャラクターの口調に違和感があるかもしれません。

方言も難しいです。o r n

そして文章もあまり調子が出ませんでした。o r n

そして日本搜索ですが、3話から「菊を探し隊」が活躍します。多
分。
いつたい誰がメンバーに選ばれたのか、お楽しみに^ ^

3・菊の行方（一）（前書き）

名前についての呼び方ですが、国名で呼ぶのは仕事内だけ。プライベートになると人名を使います。なのでこれからはほとんど人名で、国名はたまにしか出で来なくなります。

ただいきなり人名からだと分かりづらいと思うので、名前が出たばかりの人は国名・人名という形にします。

3・菊の行方（1）

日本、つまり本田菊の家の近くにある公園に、ロシアのイヴァン・ブラギンスキとプロイセンのギルベルト・バイルシュミットが菊の姿が無いか探していた。

この2人が一緒にすることは滅多に見られない。

珍しい組み合わせになつた理由が「公園に行きたかった」だった。お互い国として過去色々あつたりはしたが、今はけっこ仲がいいらしい。

昼前なせいか、親子連れの姿は見かけられない。
そして菊の姿も・・・。

公園は小さい子供から大きな子供まで、楽しく遊べるようになって出来ていた。

砂場やブランコ、シーソーにジャングルジム。どれも子供たちが安全に遊べるように工夫されたい。

「さすが菊んこだな。細かいところまで気を使うなんてアイツらしさ。ケセセー！」

公園で起きる悲しい事故が元で遊具が無くなつていいくことがあるこの国で、菊は子供達の楽しみを守る為に「安全に遊べる公園」をモットーに政府に働きかけていたのだ。

その成果が少しずつ実り始めているのである。

あと何年かすれば完全にとは言えないけど、親も安心して子供を遊ばせることができる公園が全国に広がつていくだろう。

2人は近くにあつたベンチへ腰をかけた。

「確かに公園の遊具もいいけど桜も綺麗だよね。今はまだ蕾みたいだけど、もうしばらくしたら綺麗に咲くんだろうね？きっと。」

周りにはソメイヨシノの木が何本も植えられている。イヴァンの言うようにまだ蕾だったけど今にも花開きそうだ。

日本の西側では既に桜が咲いているところもあり、満開になつているところもあるのだが関東や中部などの東側はまだつた。

毎年この季節に咲く花。

菊と並ぶ、この国の国花だ。

菊は毎年国連と一緒に花見会を催している。

その人数は年々増え、今ではほとんどの国が参加してくるまでに人数が膨れ上がつた。

「少ない人数で楽しむ花見もいいですが、大勢で楽しみのもいいものですね。」が最近の菊の口癖だ。

そんな菊に感化され、桜の魅力にとりつかれた国が何人もいた。イヴァンもその中の一人で、毎年桜が咲くのを楽しみにしている。

「ああ、さつと綺麗だらうな。今年はいつもより綺麗な桜が見れる
でしょ？って、今朝のニュースでもやってたしな！」

止まっていたホテルのテレビでたまたま見たニュースで、それをや
つていたらしい。

花の咲く予報を天気ニュースで紹介するなんて珍しいよな、なんて
笑いながら言つ。

「本当だね。菊くんのところは見ていて飽きないねー。」

二ノ一と純粋な笑顔でそう返事するイヴアン。

いつになく穏やかな空気が流れている。

その間にギルベルトはもう一回公園内を詮索してみる。しかし菊の
姿は見えず会議室で待っている仲間の元へ報告の電話をかけた。

公園には温かい風が一筋、吹き抜けていた。

>b r <
>b r <
>b r <
>b r <

> > > > >
b b b b b
r r r r r
< < < < <

3・菊の行方（一）（後書き）

菊の行方は短めに、その場所によって一話ずつのお話です。

今回はスラストラと書けました。

皆さんに読みやすい、面白いと少しでも思ってもらえるれば幸いです

^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2369u/>

約束 ~The past that forgot~

2011年10月8日19時13分発行